

「なぜ、その子供は腕のない絵を描いたか」を読んで

書店で「なぜ、その子供は腕のない絵を描いたか」の書名が目にとまった。

何か心理的に問題のある子どもの絵画に触れた本かなあと、ぱらぱらと立ち読み。

あにはからんや、一般保育所や有名幼児絵画塾等で最近よく見られるようになった幼児の行動事象に関するものだったので、早速、購読した。

著者は、芥川作家でもあり、最近では、家族、子育て、教育等に関するノンフィクションライターであった。

「腕を描き忘れる」、「三角形が描けない」、「目をつぶれない」、「四角い川を描く」、「ひとつ、ふたつも数えられない」、「言葉が出ずにすぐキレる」、「それ、これ、反対、という言葉の意味がわからない」等々の5、6歳児が増えてきている事象の原因・背景を、面接、教室訪問、母親の育児意識・姿勢の時代的変遷・検証、それらに影響をもたらす社会的側面の変遷・検証、内外の育児書文献からの検証、等々から探ろうとしたルポであった。

また、子どもからの「リクエスト食卓」に象徴されるような間違った「子ども中心」の育児思想、また、「習い事・塾」、テーマパークのような「遊び場」のように、大人が常に管理する中での生活パターンからも触れている。

著者は、これらは子どもの側にすれば、「子どものため」という名の「知的虐待」でないか、また、こうした事象で育った子どもが、どういう大人なり、どういう社会になるのだろうかかと危惧している。

「幼児期の空洞化」には関心がある（「雑学」バックナンバー書籍等読後感関係（Ⅱ）P、2005.03.25.「『井勘定の子育て』でも、いいのでは……」、また、2005.06.20.「『自身を他者化する視線の形成過程』を求めて…」：参照）自分だが、この本はその事例の数々を突きつけられるものでもあった。

ここまで現実に幼児期の空洞化が進みその影響が先の例示のように、今の幼児に一般的な事象として増えてきている現実を知り、正直、唾然。

では、さてこうした事象への解決策は？となると、色んな側面が纏れ合っただけに一筋縄ではいかず、なかなか難しそう。

私なりの勝手な推測だが、ニート問題同様、社会が豊かになることに伴う裏返しかなあと感じた。

やはり、大人一人一人が今こそ「人間性の豊かさとはどういうことか」の自らの検証作業を始めるしか、解決策は見えてこないような気もした。

（2005年9月19日 記）